

女学生謝婉瑩から作家冰心女士へ

濱田，麻矢
神戸大学

<https://hdl.handle.net/2324/1913938>

出版情報：“《春水》手稿与日中文学交流：周作人、冰心、滨一卫” 国际学术研讨会论文集. 1, pp. 99-102, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：

女学生謝婉瑩から作家冰心女士へ

神戸大学 濱田 麻矢

冰心が初めて書いた小説は1919年9月18日から22日まで『晨报』に連載された短編「二つの家庭」であり、この時初めて「冰心女士」という署名が使われたことはよく知られている。『冰心全集』によれば、彼女は「冰心」と名乗る前、やはり『晨报』に二篇の散文を掲載していた。最初は1919年8月25日掲載の「二十一日聴審的感想」であり、次は同年9月4日掲載の「“破壊与建設時代”的女学生」である。二つの散文の署名はどちらも「女学生謝婉瑩」であった。

1919年5月4日、当時北京協和女子大学理化予科一年生だった謝婉瑩は、北京を席卷していた学生運動に積極的に関わり、学生会に選ばれて女学界連合会宣伝股に参加して活躍していた。この五四運動で逮捕された学生の裁判を傍聴しに行き、請われてその報告を発表したのが活字になった第一作「二十一日聴審的感想」であったことを考えれば、冰心と五四新文化運動と『晨报』は、まことに幸運な出会いを果たしたのだと言える。1900年生まれの冰心は、「女学生文筆家」として、五四運動の数ヶ月後には早くも世に送り出されたのだった。同じ1900年生まれで燕京大学の同窓でもなった凌叔華が『晨报』で小説を発表したのは1924年、やはり1900年生まれの馮沅君が『創造季刊』に小説を発表したのは1923年、1904年生まれの林徽因が初めて『大公報』に詩作を発表したのは1933年、そして1898年生まれの廬隱が『晨报』に散文でデビューしたのは1920年である（小説創作を始めたのは1921年）。「五四女性作家」として知られる他のどの作家よりも、五四という衝撃に対する冰心の反応が早かったことは、彼女の創作の特徴にも関わっているように思われる。たとえば「“破壊与建設時代”的女学生」は、「数十年前に現れた新しい名詞」である「中国の女学生」を、三つの時代に分けてみせる。女学生と名がつくだけで尊敬の対象となった「崇拜の時代」、その反動として学校に通う女生徒が無条件に軽蔑の対象となった「嫌悪の時代」、そして両者の止揚としての「現実の時代＝現在」。女学生謝婉瑩は、世の中の女学生嫌悪を是正し、後進の少女たちが大手を振って進学できるよう、現役の女学生たちは万事に気をつけねばならないと訴えた。派手な服装は慎み、身の丈に合わないような高邁な議論を避けて女性らしい話題を選び、社交するにも劇場のような“誤解を招きやすい”場をさけて音楽会や講演会を選ぶべきだという具合である。このように、「世の中から愛される女学生たれ」という激励と抑制が、他ならぬ現役の女学生によってなされたことは興味深い。

「女学生謝婉瑩」という署名は、その初々しさと当事者性を強調しているが、こうした屈託

のなさは、同じく女子校を舞台にした小説を書いた蘆隱には決して見出せないものである。この「愛される現役女学生作家」という立場は、冰心の立ち位置を際立たせるとともに、のちのちまで彼女を規定するものになったのではないだろうか。

女学生にとっての理想のロールモデルといえるヒロインを描いた「二つの家庭」の後、謝婉瑩は冰心という書き手になったが、彼女が「創作する女学生」であることには変化はなかった。最初期の創作論「我做小説、何曾悲觀呢？」¹には、「午後四時、学校から家に帰った後」、発表した小説が悲観的にすぎるといふ友人からの批評を受けた冰心が両親の意見に耳を傾けるところから始まっている。「私が小説を書くのは、社会を感化するためだ」と女学生作家は書く。ここでは、彼女がいわゆる「問題小説」を目指していたというその口ぶりよりも、「学校帰りの娘が、両親との対話の中で自分の創作を見つめ直す」という枠組みに注目しておきたい。

現役の女学生作家という属性が強調されている作品として、1920年1月29日、やはり『晨报』に発表された小説「莊鴻的姉姉」も挙げておこう。ストーリーは語り手「私」の家に自分の一番目の弟の友人がやってきて亡くなった姉を悼むというものなのだが、やはり最初に「書き手としての自分」と「書くことを励ます家族」という枠が提示されるのである。

「物語は、「わたし」の弟が久しぶりに進学先から実家に戻ってきたところから始まる。弟は部屋を見渡して「僕たちはまた小説の中に入ってきたね。この部屋の中は、姉さんが書いた『秋雨秋風愁煞人』の最初の描写そのままじゃないか」と笑うのだ。『秋雨』とはその三ヶ月前に『晨报』に掲載された短編²で、女学生が早婚させられる悲劇を描いたものである。弟の言う“最初の描写”とは以下の通りだ。

秋風はざわざわと音を立てて吹き、秋雨はしとしとと降り続けていた。窓の外のアオギリと芭蕉の葉のたてる物音が、秋の雰囲気をも十二分に伝えている。深緑のカーテンは低く垂らしてあった。灯りのもとで、わたしは窓辺の机の前に座り、黙って本を読んでいた。机の上の花瓶に生けた木犀が、あまりの寂しさに耐えかねたものか、ひっきりなしに清らかな香りを私に届け、私に顔を上げてそちらを見るように促していた。まるで微笑みながらこう語りかけているかのようだ。「ねえ冰心！窓の外は“秋雨秋風人を愁殺す”だけれど、窓の内側は暖かくて春のようね！」

暖かく守られた家の外に広がる晩秋の光景は、秋瑾の辞世の句を思い出させるように冷

¹ 『晨报』1919年11月11日。

² 1919年12月30日から11月3日に連載。

たく厳しい。だからこそ、暖かく整えられた家で読書できる「わたし」の幸福が際立つ。実際、読んでいた本から落ちた手紙から、早婚を促された「私」の親友二人のうち一人は亡くなり、一人は生ける屍となったことが語られる。手紙は語る――

「淑平は死んでしまったし、私も死んでしまったようなもの。あなただけは相変わらず八面六臂で活躍していますね。私と淑平の責任と希望は、みなあなたに預けます。努力し、奮闘してください。あなたの得たチャンスと地位は、とても得難いものであると知ってください。そして私たち二人の目的は「自分を犠牲にして社会に奉仕する」ことにあったと覚えていてくださいね。」

『晨报』の読者は、三ヶ月前に同紙に掲載されていたこの「秋雨」――掲載時には題の前に「実事小説」という注が加えられていた――を覚えていたであろうか。革新を求める若者たち、特に女学生に向かって吹き荒れる凄まじい抑圧の嵐から、語り手「わたし」は無傷でいる。それは彼女の属する開明的で暖かい家庭が防波堤になっているからであり、そうした家庭を育むためには女子教育が必要なのだ、というのが女学生でもある冰心の主張だった。デビュー作「二つの家庭」は分かりやすい対比を用いてその持論を展開したものである。冰心の書いたものに多少なりとも注目している読者であれば、この「莊鴻」における弟の言葉を読んで、自分が読んでいるものが一種のメタフィクションであるという感覚を持つことになっただろう。それは、父母や弟と一緒に、冰心なる作者と一緒に育てているような感覚と言ってもいいかもしれない。

さて、「莊鴻」に戻ろう。「今は休みで時間があるんだから小説を書いたら？」と勧める弟に、彼女は「お正月休みなんだから休まなくてね。あなたも帰ってきたことだから、楽しくおしゃべりしたいわ」と答える。そこに弟の友人、莊鴻が来訪し、姉が亡くなった経緯について語るのである。女だからと教育を受けさせてもらえず、苦労ばかりで亡くなったという莊鴻の姉のエピソードは、先に発表された「秋雨」のバリエーションとも言える、旧社会によって抑圧される少女の悲劇だ。こうして物語の本編と言える部分が語られた頃、「私」の母と小さい弟たちが観劇から帰ってきて場面は転換する。莊鴻が去った後、なおも物思いに耽る「私」を見て二番目の弟が「おにいちゃん、お姉ちゃんは一人座って何しているの？」と聞く。そこで一番目の弟は「お姉ちゃんはまた小説を書こうとしているのさ」と笑って答えるのだ。この短編は、女子教育の必要性を訴えて「社会を感化する」目的を持つと同時に、書き手の「私」自身がいかに安全な場所にいるかを伝えるものでもあった。

最初期の冰心が書いていたテーマそのものは、保守的な家父長による抑圧、女子教育への無理解、仲介による早婚の理不尽などなど、他の作家とそう変わるところはない。しか

し彼女自身は、「現役女子学生」であると同時に、それら種々の圧迫とは無縁の暖かい家庭にいたし、そのことを創作の端々に書き込まずにはいられなかったのではないか。

冰心の初期創作は、まず『晨报』を舞台とした。「女学生謝婉瑩」で始まった素直で伸びやかな散文は、やがて冰心という小説家に署名を譲り、家族の愛を一身に受けて育った「私」が不合理で冷酷な世の中に相対する物語の数々を生み出すことになる。一人称の語り手を採用していなくても、例えば「最後の安息」の恵姑も「愛されて育ち、向学心を忘れない少女」の典型と言えるだろう。ヒロインは家族と避暑にでかけた先で義母に折檻され続けている童養媳の翠児に偶然出会い、自分とあまりにかけ離れた境遇の彼女に無限の同情を抱き、なんとか助けになりたいと彼女の洗濯を手伝ったり読み書きを教えてやったりする。翠児は最終的に義母のひどい打擲のために命を落とすのだが、恵姑との出会いは哀れな翠児にとって最初で最後の安息であったとされるのである。「わたし」＝恵姑は自分に向けられた愛と善意を疑うことなく、同じように愛と善意をより恵まれない人々に注ごうとする。その言葉の積み重なりは、『晨报』での冰心作品を連作とみなすことでよりはっきりするかもしれない。

小説家冰心が現れたのち、謝婉瑩が「冰心」ではない名義で『晨报』に小説を書いたのは載せられたのは1920年9月12日掲載の「是誰断送了你」である。「悲君」という筆名で発表されたこの短編には、興味深いことに家族の愛に包まれて育った少女は現れない。両親の反対を押し切って学校に通い始めたものの、見知らぬ男子生徒から付け文されてしまい、父母の怒りと絶望によって命を落としてしまうというヒロインを描いたものだ。優等生が周りの悲劇を語るというストーリーからの脱却を図ったようにも思える一篇だが、『晨报』における冰心イメージと異なる作風を持つために別の筆名が選ばれたのかもしれない。愛、特に母性愛を女学生以外の角度から描き、冰心が本格的な小説作家として認められるのは翌年4月、『小説月報』に発表された「超人」によってであった。

いずれにせよ、恵まれた立場と磨かれた感受性、そして伸びやかな好奇心が彼女をして口語による叙情詩の創作にも導いたのであろう。小説の端々にも現れる、身の回りを彩る自然への愛を創作の中心に据えるためには、小説よりも口語自由詩のほうがずっとふさわしかったに違いない。そうして生まれたのが『繁星』『春水』2つの詩集であった。

周囲で起こったことをリアルタイムで加工し、さまざまなジャンルの作品にして『晨报』その他のメディアに発表する——こうした女学生冰心の姿は、今の時代にインターネット上で活躍するクリエイターに共通するところもあるようにも感じられる。